

古代戦士シンフォギア

超越の破壊者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、世界を滅ぼした一体の巨人——トリガーダーク。彼は自分の思うままに破壊すると突如としてその姿を消す。そして、闇黒の戦士は、現代に蘇る。

目次

第一章 月を穿てば恋実らぬ

第一話 「未来を染める、漆黒の闇」	1
第二話 「覚醒せよ、拳となったガンニール!!」	10
第三話 「仲間に向ける意味」	18
第四話 「約束と未来の■■」	25
第五話 「奪われし鎧と筋肉パワー〜!」	32
第六話 「剛力闘士ダーゴン」	42
第七話 「デュランダル争奪阻止」	46
第八話 「青に影」	55
第九話 「過去から未来へ、未来から過去へ」	61

第一章 月を穿てば恋実らぬ 第一話 「未来を染める、漆黒の闇」

かつて、この世界はたった一人の巨人によって滅ぼされた。全身に白く禍々しい鎧のような体つきをしている。所々からトゲのようなものがあり、胸の部分には青く光るカラータイマーがある。

巨人は目の入るものすべて破壊した。時に拳で、時に足で、時に腕から放たれた黒い光線で。

誰も巨人を止められる者はいなかった。巨人に挑んだ光の巨人達も、地上に出てきた怪獣達も、宇宙から侵略しに来た怪人達も、あの巨人の前には敵ではなかった。

巨人はあらゆるものに恐怖を植え付けると突如その姿を消した。人々は驚愕した。なぜ急にいなくなったのか……それは誰にもわからない。

パタツと音をたてて読んでいた本を閉じる。

大きく伸びをして椅子から立ち上がると左腕につけていた時計を確認する。

11時30分

「おお、もうこんなにも時間が経ってたのか……」

苦笑いを浮かべてしまう。昔からなにかひとつのことに集中すると時間を気にしないことが多い。

もうすぐお昼になるな。早くお昼御飯を作らなくては……。

ん？ああ、自己紹介が遅れたね。初めまして、俺の名前は闇塚健吾やみつかけんご。ちよつと訳ありな部分もあるけど、それを抜きにしたら何処にでもいる普通の人間です。

今は普通の一軒家に住んでいる。住人は俺を含めて二人。

「今から昼御飯作るけど、なにか要望あるか？」

部屋を出て隣で寝ているであろう住人に声かける。色々訳ありで気軽に外に出られない住人さんは、隣の部屋で寝るかゲームするかのどちらかだ。

昔はもつと大人しくて優しい子だったらしいが、何があったのかは知らないけどグレちゃってます。

「……別ににもいらない。お腹すいてない」

「そう言っただけ昨日も食べてないでしょ？なにか食べなよ」

「うっさい!!今はなにもいらなくて言ってるでしょ!」

ドアを蹴られた。一応起きてはいるみたいだけど、機嫌はよくないみたいです。これ以上怒らせるわけにもいかないから俺だけ一階に下りる。

トホホ、今日も一人飯か……。

悲しんでも仕方ないと思ってぱっぱと料理を作り上げる。今日はチャーハンを作ってみた。

味は……うん、普通だ。次回また頑張ろうか。

チャーハンを食べ終わってそんなことを考えていたら、二階からトントンと足音をたてて住人さんが下りてきた。

「おはようセレナちゃん。いや、時間的にこんにちはかな？」

「別になんでもいいじゃん……眠い」

俺が住んでるこの家に住むもう一人の住人さんはセレナ・カデンツァヴァ・イヴ。偶然砂浜で倒れているのを俺が拾って以来、一緒に住んでる女の子。

今は話とかもしてくれるけど最初はとても怖かった。何しろ警戒心が強くてちよつと近づいただけで殴ってきたから。理由を聞いても答えてくれない。

まあ、昔何があったのかだけは今も話してくれないけどね。話したくないなら聞かない。無理に聞くもんじゃないし。

「一応チャーハン作ってあるから食べといてね」

「……どっか行くの？」

不安そうに聞いてくる。

「まあね、今日はツヴァイウングのライブがあるんだ。近所のおばちゃんも偶然チケットを入手してみたみたいでね」

「ふうん、そっか……行つてらっしゃい。私は寝てるから」

苦笑いを浮かべてしまうよ。

「じゃあ、行つてくるね」

そう言つて俺は外に出た。

やつて来ました。ライブ会場。

やっぱり人気があるだけあつてたくさん人がいるわ。

ツヴァイウングとは、風鳴翼と呼ばれる青髪の少女と天羽奏と呼ばれる赤髪の少女によるアイドルユニットだ。その二人が奏でる歌と躍りは様々な人の心を鷲掴みにした。

世間ではツヴァイウイングのチケットを一枚入手するのにとても時間がかかる。それほどまでに大人気なのだ。

「うへえ、凄い熱気」

まだ始まってすらいないというのに、会場は熱々だ。正直暑苦しいのは苦手なんだ。昔共に旅した仲間の口癖が「好敵手」って言う馬鹿がいて、そいつと同じぐらい今の会場は暑苦しい。

いやまあ、「エレガント」が口癖のアホは策士を名乗ってるくせに時々失敗したりするしキレたら超面倒くせえし。

いつもいつも俺に付きまどってきた女もウザかったな……ああ、なんか話が変わってきたな。なんでライブ見に来たんだろう……？

『盛り上がっているかー!!』

昔のこと考えていたらいつの間にかライブ始まってるし……ふざけんな。

ライブ衣装に付けられた白い翼を拡げながら降りてくる二人は、まるで天使のようだと思っていた。奏と翼が地上に降り立ち、歌い始めると観客たちは更に色めき立つ。

ライブ会場のボルテージは、最高潮に達していた。天羽奏と風鳴翼——ツヴァイウイングの歌に魅入られた観客たちは、はち切れんばかりの歓声で歌い終わった二人に応えた。

『皆さん。今日はこのライブに来てくださり、本当にありがとうございます！』

『まだまだ宴は終わらないからなく。みんな、最後までついてきてくれるかあ?!』

『『『『ツヴァイウイング！ツヴァイウイング！ツヴァイウイング！』』』』』

異常な熱気で会場全体が盛り上がる最中、大勢の観客の中の一人で俺の隣に座ってサイリウムを握りしめていた少女が、瞳を輝かせながらツヴァイウイングを見つめていた。

ツヴァイウイングが奏で唄う歌の迫力に感動し、言葉がでなかった。

最初はツヴァイウイングのことをよく知らなかったであろう少女

が、今ではすっかり虜になってしまっている。

「これが、ライブ！これが、ツヴァイウィングの歌なんだ!!」

今日この日の感動を絶対に忘れることはないだろうと——彼女は思っているだろうね。

次の曲のイントロが流れ出し、他の観客に合わせてサイリウムを振るい、少女が精一杯の歓声を上げようとした瞬間、会場の中心が突如として……爆発した。

あまりにも突然の事態に、会場全体が騒然として誰も動けずいた。当然俺も流石に驚いて固まった。

翼と奏も曲の流れを無視し、歌わず食い入るように爆心地を視線を向けていた。

人々が混乱しながらも静寂とも呼べる空気が漂い始めた数瞬に、状況の変化に気づいたのは奏と翼だった。

視界の端に風に流された煤を捉えて、二人の背筋が凍った。

「——これは、まさかっ」

「ノイズが、来る——!」

二人の口から零れた言葉通り、爆心地の近くにいた人たちが炭素の塊に変えられて、粉塵となってその場で崩れ落ちた。

『の、ノイズだあっ』

認定特異災害『ノイズ』。

人類の天敵にしてこの時代最大の死の宣告者が、よりによって大勢の人間がいる中心に出現するという、最低最悪の状況が起きてしまった。

観客たちは悲鳴を喚き散らしながら、ノイズたちから逃げようとする。しかし、無慈悲にもノイズは人々に死の魔手を伸ばした。近くにいる人間から片っ端に命を奪い尽くした。

ノイズの発生源から離れていた一人の観客は思った。こんなに離れているんだから自分は逃げられる、と安堵して身を翻した途端、意識が途切れた。否、死んだ。

その場にいた人間が、その人物の死に絶句しながらも思わず空を見上げてしまった。茜色に染まった空を悠々と飛行している、数多の飛

行型ノイズの姿が確認できた。

飛行型ノイズは高速で急降下を行うと、地上とは違い無差別に各所で観客を殺し尽くす。

誰もが自分の命惜しさに我先にと出口に向かう。その場にいる家族や兄弟を見捨てて。

俺はすぐに状況を把握しはぐれた子供がいなか確認する。普通の人よりちよつと視力がいい俺の目なら恐らく逃げ遅れて泣いている子供を見つけられるだろう。

「うええええん!! ママーーー!」

いた! 俺は爆発的な身体能力でノイズに襲われそうになっていた子供のもとまで走り抱きつきながら転がる。

そして、まだ誰もいない出口に向かって走るとそのまま扉を蹴り開ける。

「さあ、早く行くんだ!」

「う、うん。ありがとう」

涙を流している子供の頭を撫でて安心させるとすぐに次の場所に向かう。

そして、見てしまった。つい先程まで隣でツヴァイウイングのライブに感動していた少女の胸から血が流れており、その近くでなにやらオレンジ色の鎧つばいにかを着た奏が唄を歌おうとしていた。

「その歌を歌ってはダメえ!」

その声を聞いた瞬間、俺の中でなにかが弾けた。

俺は懐からブラックスパークレンスとトリガーダークキーを取り出すと、躊躇いもなくキーを押す。

『Trigger Dark.』

ブラックスパークレンス《ハイパーガンモード》にトリガーダークキーを挿入しガンモードから変身形態スパークレンスモードにする。

『Boot up, Dark Zepherion.』

俺の周りが暗い闇に覆われブラックスパークレンスを左手をゆつくりと前に、右手を顔の近くに持つてくる。

「未来を染める、漆黒の闇……! トリガーダーク!」

そのままブラックスパークレンズを胸の前に持つてくる。

『Trigger Dark.』

俺の身体は黒い闇に覆われ空へと飛んでいった。

~~~~~

全身がボロボロになりながら槍を空へ掲げた奏は、禁じられた絶唱を歌う。

絶唱とは、装者の負荷を省みずにシンフォギアの力を限界以上に解放する歌。増幅したエネルギーを、アームドギアを介して一気に放出する。その力の発現はシンフォギアごとに異なるが、共通して発生するエネルギーは凄まじく、ノイズを始めとするあらゆる存在を一度に殲滅し得る絶大な効果を発揮する。

そのため、装者への負荷も、生命に危険が及ぶほどに絶大。反動ダメージは装者の適合係数の高さに伴って軽減されるが、そもそも適合率の高い適合者自体が稀でありLINKERの負担や、追い詰められた状況で使用される負担やダメージもありいずれにせよ大きなダメージは避けられない。

だからこそ本来歌うことは禁じられている。

(ゴメンな翼……お前を一人残すことになっちまって)

本当なら奏もまだ死ぬのは嫌だ。だが、今自分が歌わなければたくさんの方が死んでしまう。だから――

「なっ!？」

突然黒い闇が降ってくるなど誰が予想できようか。闇が地面に降り立った瞬間、凄まじい衝撃波が発生し絶唱を途中まで歌っていた奏の体を吹き飛ばした。

「な、なんだあ!？」

訳がわからず落ちてきた場所を見ると禍々しい鎧のような体つきをした戦士が立っていた。トゲのようなものがあり、胸の部分には青く光るランプのようなものもある。

『……』

突然現れた戦士はゆっくりと後ろを向き、地面に座り込んでいる奏を見つめる。

「ッ!!」

視線が重なった瞬間、奏の背中にゾツと冷や汗が落ちる。冷たく暗い目が自分を見つめている。

(……、怖い)

戦士はそれ以上奏に対して関心を失ったのか、前を向くとノイズの方を見る。そして一方的な戦いが始まった。

戦士が拳を振り上げればその風圧でノイズが消滅していく。戦士が大地を踏めばその衝撃でまた消滅する。

「っ、強え……」

その凄まじい戦いに奏の瞳は戦士に釘付けになった。

その一切無駄のなく隙のない身のこなし。

空から強襲してきたノイズを掴み後ろから襲ってきた人型ノイズにぶつける。その後後ろ回し蹴りで数体のノイズを纏めて消滅させる。

「奏！大丈夫!？」

「翼か」

今にも泣きそうな表情でノイズを斬り倒しながら駆け寄ってくる。

「あたしは大丈夫だ。中途半端に絶唱したせいだな」

「もう、あんな無茶はやめて！私は奏が亡くなった世界で生きられる自信がないの」

奏に抱きつき声をあげて泣く。まだノイズが存在しているというのに。

だからこそ近くまで接近していたノイズに気づかなかった。

「ツ！！翼！」

「なっ！」

だが、それは杞憂に終わった。目にも止まらぬ速度で走ってきた戦士がノイズを殴りつけたから。

戦士はその後また無数にいるノイズの方に顔を向けると身体中から赤黒い電撃を放つ。

そして、両腕を前方で交差させた後、左右に大きく広げてエネルギーを集約させ、L字型になるように腕を組む。すると腕から赤黒い色の光線が放たれる。

光線は地上と空中にいるノイズ全てを飲み込み爆発させた。

「ははっ……マジかよ。あんなにもいたノイズを一人で倒しやがった」

声が震えた。あまりの強さに、恐怖心が拭えなかった。

突然戦士が奏の方を向き近づいてくる。その動作に翼がアームドギアを構えるが、翼のことなどお構いなしに目の前に来ると、手を胸の前に添える。そして青く光るランプー——カラータイマーから光を奏とその後ろにいる少女に向けて優しく放つ。

光はたちまち二人の傷を癒していく。それを確認した戦士は奏達に背を向けるとゆっくりと歩き出す。

「ま、待てーお前は一体何者だー！」

翼がそう声をあげるが、戦士はそれを無視して闇の中に消えていく。

## 第二話 「覚醒せよ、拳となつたガンニール!!」

これはどこかの星の記憶。

突如やってきた四人の巨人。そのうち二人が殴りあっていた。

『ふははははははは！ 流石だな！ これでこそ我が好敵手に相応しい!!』

『……この筋肉バカめ』

全身に赤と黒の鎧のような姿をした巨人。名は剛力闘士ダーゴン。その二つ名に違わぬ腕力を持つ闇の巨人の一人であり巨人の中でも屈指の戦闘狂である。

もう一人は全身に灰色の鎧を着たような見た目をしている巨人。名を闇黒勇士トリガー。四人の巨人の中でも最強の部類にはあり常に寡黙な巨人だ。

二人は常に強くなるために鍛練を行っていた。今やっているこの殴りあいこそ、ダーゴンがトリガーと共にやっている鍛練方法である。

『我らはもつともつと強くならねばならない！ そのためにもやはり鍛練は必要だろう?』

『……否定はしない』

トリガーは内心呆れている。どこまでも強さを求める筋肉バカに。そして、どこか心の中で暖かさも感じていた。自分でもバカな鍛練方法だと思っているこの殴りあいを、呆れこそするもの、嬉しさもあった。

『……俺達は強い。それは、あの忌々しき光の巨人を倒せるほどにな。だが、ウルトラの神とクソジジイには勝てない』

『確かにな！ 前もこてんぱんにされたからな!』

『……お前が強さを求めるなら、俺は幾らでも鍛練に付き合おう。俺達に限界など存在しない』

『ふははははははは！ 今日はやけに喋るではないか』

『……死ぬ、この筋肉バカが』

闇の力を乗せた渾身のパンチをお見舞いする。それによってダーゴンは地面に倒れ伏すが、すぐにトリガーが手を差し伸べる。

ダーゴンがその手を取り立ち上がると、また構えをとる。トリガーも構えを取りまた殴りあう。

あのライブ会場の悲劇から二年が経った。

今日もセレナは部屋に籠ってる。外に出たくないらしいし怒らせないように刺激してはいけない。一度怒りに火が灯ったセレナを落ち着かせるのはとても手がかかるので。

俺はライブ後、近くのふらわーって言うお好み焼きのお店でバイトを始めたんだ。

いやねえ、ライブの時の俺を見たらわかると思うけど、俺元々食べ物とかは食わなくても生きていけるんだよ。だけど俺と一緒に住んでいるセレナは純粋な人間だから当然お腹が空いちやうから、料理を

つくってあげなくちゃいけない。だけどお金がないと当然食べ物なんて手に入らない。

まあ、そういったことがあってバイトすることにしたんだ。

「お兄さくん、こっちにもお好み焼きくださーい」

「はいはい、今行くよ」

求められたのなら応えるべし。俺はすぐさまお好み焼きに必要な具材を持つと、俺を呼んだお客さんの元まで向かう。

最初こそは俺はお好み焼きの具材を持っていくだけの作業だった。だけど最近ふらわーのおばちゃんが腰を痛めているので俺が代わりに努めている。

おばちゃんに比べれば俺の作るお好み焼きはまだまだの出来だろう。当然俺は満足していない。

おばちゃんの作るお好み焼きは俺の作るお好み焼きよりも数千倍美味しいからだ。だからこそ俺は満足できない。

本当なら俺の満足のいく美味しいお好み焼きをお客さんに提供してあげたい。だが、俺の腕ではまだまだ不可能だ。

くそ！ 昔から壊すことは得意だったけど心のこもったなにかを作ることは苦手だよ！

まあ、細かいことは気にしない。

俺のバイト時間は大体3時ぐらいまでって決まっている。というか、おばちゃんがそう決めた。

帰ったらセレナにご飯を作ってあげるためにスーパーで具材を買った俺は、帰路についていた。

あれから二年間の間ノイズが現れることはなかった。そりやあもう不気味なぐらいな。

ノイズが現れる規則がなにかはわからない。もしかしたら誰かが操っている可能性もある。

理由の存在しない過程なんてない。だからノイズにも現れて人間を殺す過程が存在するはずなんだ。

「……ん？」

そんなことを考えていたら空から灰が落ちてきた。面倒臭いな……全く。

「未来を染める、漆黒の闇……トリガーダーク！」

ブラックスパークレンスにトリガーダークキーをセットし胸の前に持つてくる。その瞬間、俺の身体は闇に包まれ闇黒勇士トリガーダークになる。

『……やるとするか』

取り敢えず俺の近くにいるノイズどもを殺したら一番数の多い場所に移動するとするか。誰かを追いかけているようだからな。

『ゼアー！』

空にいるノイズに向かってダークゼペリオン光線を放つ。俺の放ったダークゼペリオン光線を横にずらしていくことで多くのノイズを葬り去る。

俺が持つ技の中の最強技だ。

地上にいるノイズにはダークハンドスラッシュや拳をお見舞いして殺す。とにかく俺の平穏を脅かすノイズどもは生かしておくわけにはいかない。

かつて俺から自由を奪おうとしたあの女を殺したようにな……。



と、今確認できるノイズを全て殺した。すると、近くの工場辺りで光が伸びた。

恐らく何らかの力が覚醒したのだろう。それに、この力には覚えがある。

二年前のライブ会場での悲劇の時、偶然俺が助けることとなったオレンジの鎧を着た女と同じものだ。

確かあの時は死にかけだった気がするんだが、仕方ないな。今回も助けにはいるべきか。

そう思った俺はすぐさま光の元まで飛んでいった。

俺が見た時、その子は二年前助けたオレンジの鎧と似たような物を着ていた。

それは見てわかるぐらい戦うことを知らない感じだった。偶然力が覚醒したって言うのが正しいだろう。

脇には女の子を抱えているのを見るのに、一緒に逃げていたのだろう。そして逃げきれなくなって死にそうなときに覚醒したって感じか。

まあいい。

「うわ!?!」

俺はその子の目の前に降りると、ノイズを殴り殺す。

『……その子を安全まで場所まで逃がせ』

それだけ言うと、俺はノイズの方に意識を集中させる。

Croitzalronzellgunnirzizzl  
Imyuteus amenohabakiriron

突然歌が聞こえた。それもこの戦いの場に相応しくもないはずの歌が。相応しくもないはずなのに、なぜか心が安心できる。

「あれ？ あん時のアンノウンじゃねえか」

オレンジの鎧を着た女——ツヴァイウイングの一人天羽奏。オレンジの槍——確か GANG ニールを使う女だ。

そしてもう一人、

「今はアンノウンよりもノイズを優先よ」

青い鎧に身に纏った女——奏と同じくツヴァイウイングの一人である風鳴翼。天羽々斬と呼ばれる刀を持った防人だった気がする（アイドルにそこまで興味がないのでうる覚え）。

「え？ ええ!?翼さんに奏さん!? なんでえ!？」

そしてこの女は二人と知り合いなのか驚いている。別にどうでもいいが……。

『……よそ見をするな。命取りになるぞ』

「は、はい!!」

いい返事だ。若さを感じるが、元気な子供は好きだぞ。

「なっ……喋った、だど!？」

「二年前は全く喋らずに消えたのにな」

翼はなぜか驚いているみたいだが、逆に奏の方は薄く苦笑いを浮かべている。

と、二人が俺の方を向いた隙に襲おうとしたノイズを殴り飛ばす。

まあ、殴った瞬間に消滅してんだけどさ。

「二年前にも感じたが、やはり凄まじいものだな」

「確かにな。こりゃああたしらも負けてられないな!」

その言葉を最後に二人もノイズに向かっていく。

そして面倒くさいから省略するけどノイズ退治は五分もかからずに終了した。結果的に面倒くさくなった俺がダークゼペリオン光線

とダークハンドスラッシュでごり押ししたので。

その光景を見た女がまたもや驚いた顔をしていたけどね。

戦闘が終わり黒服の大人達が現場に急行してきた。

女（話によると立花響と言うらしいのでこれ以降は響とする）が暖かい飲み物を受け取った瞬間、安心したのか鎧が光となって制服となった。

それに驚いた響が飲み物を溢しそうになったので、たまたま後ろにいた俺が身体を支える。

「あ、ありがとうございます。私立花響って言います!! 貴方のお名前を覚えてもらってもいいですか!!」

元気っ娘だなあ。

「やめとけ、そいつになに聞いても教えてくるねえよ」

『……闇黒勇士トリガー』

「教えるのかよ!!」

うるさい奴だな。

俺は響達に背を向けて歩き出す。

「待て！お前にも私達に同行してもらおうぞ！ 色々聞きたいことがあるからな」

「そうだな。あたしも聞きたいことがあるし、二年前の件についても言いたいことがある。着いてきて貰えねえか？」

一瞬だけ足を止め奏達を見る。なぜか武器を構えられたが、まあいいか。

『……ついていく理由が俺にはない』

「そちらになくとも此方には来てもらう理由がある。なんなら無理矢理にでも……」

『……できるのか？お前の……お前達の実力で？』

その言葉で翼は黙り込んだ。それ実力ないのを認めてるのと同じだぞ。

俺は身体を闇に包み込んでその場を去った。

「帰ってくるのが遅い！」

『ぐはあ!?!』

なんでドロップキックかますのセレナさんや？  
理不尽にもほどがあるよ？

### 第三話 「仲間」に刃を向ける意味

これはどこかの星の記憶。

青と白を貴重とした巨人——俊敏策士ヒュドラム。多彩にして狡猾な策略と超スピードを駆使した戦いを得意とし、相手の感情を逆撫でするような嫌らしい戦法も使う闇の巨人の一人である。

『エクセレント！流石私と言ったところですねえ』

『……なにがだ？』

『おや？ 貴方も来ていたのですか。見てみなさい。この美しい滅びを……ッ!!』

ヒュドラムの後ろから声をかけたのは闇黒勇士トリガーだった。トリガーはヒュドラムが滅ぼした惑星を見て溜め息を吐く。

『相変わらず趣味の悪い滅ぼし方だな』

『おや、お気に召さなかったですか？』

『……カルミラよりはマシだな』

『ええ……』

頭痛がするのか頭を押さえ始めるトリガー。それを見てヒュドラムはドン引きした。

『……お前は変なところで詰めが甘い。時には油断なく慎重に策を考えるのもいいと思うぞ？』

『私の策になにか不満がおりますか？』

『やれやれ、わかってないのならこれ以上は言わない』

『ああ!? なんだそりやよ！ テメエから言っというてふざけんじやねえぞゴラア！』

トリガーの言い方が気に食わなかったヒュドラムはいつもの紳士めいた口調が乱れるほどキレると、ダガーヒュドラムで斬りかかる。だが、

『お前は戦闘能力は俺達よりも低いが、冷静に状況を判断し策を立てる能力がある。速さだけなら俺と互角に戦えるんだ。もう少し頭を

『使え』

振り向くことなくダガーヒュドラムを鷲掴みしたトリガーは、そう言うたダガーヒュドラムから手を離す。そして宇宙に向けて飛び去っていった。

『私は、貴方のように強くなりたいですよ』

リディアンの近くに群がるノイズ。それにいち早く駆けつけたトリガーが戦っていた。

『ゼエアー！』

闇の力を纏わせた拳がノイズにぶつかる。その衝撃で近くにいたノイズまで消滅した。そしてその場から飛び上がり空中に浮かんでいたノイズに膝蹴りを食らわせる。

地面に着地するとゼペリオン光線を放つ。多少建物を壊してし

まったことに罪悪感を抱きながら次の標的を探す。

すると、歌を奏でる姫達の綺麗な歌声が聞こえてきた。

『……今頃来たのか』

「悪かったな。と言うかお前が早すぎんだよ」

槍を振り回しながら奏が苦笑する。その隣では翼が鋭い目付きでトリガーを睨み付ける。

『あの娘も来たのか……』

「えへへ。私も一緒に戦いたくて。この手で誰かを救いたいんです！」

『……………そうか。死ぬなよ』

響がお人好しを過ぎた発言したことにトリガーの視線が一瞬だけキツくなる。だが、それに気付いた者はいなかった。

奏者達が歌いながら戦う姿を見て、トリガーもまたノイズに向かって拳を振るう。

そしていつもの如く戦闘が終わる。こちらこそ、グダグダとか言わないッ!!

戦闘が終わると響は翼の方に向き直る。その後ろでは奏が槍を担いで見守っている。

「私、今は足手まといだと思いますけど一生懸命頑張ります！だから、私と一緒に戦ってください！」

「そうね」

翼は響とは反対のノイズが爆発している所を見ながら言う。

「本当ですか！」

翼の返答に、響はつい嬉しそうな表情と声を出してしまうが――

「あなたと私、戦いましょうか」

「ええ!？」

自らの方へと向けられた剣と翼の冷たい目を見て固まってしま  
う。

「おいおい、翼……」

「奏は黙ってて！」

「あの……そういう意味じゃありません！翼さんと力を合わせ……」

「分かっているわ、そんな事。」

「だったら何故…?」

響は翼が何故自分に刀を向けているのか分からなかった。

「私があなたと戦いたいからよ。」

「!?」

「私はあなたを受け入れられない。力を合わせ、貴方と共に戦う事など、風鳴翼は許せるはずがない。あなたもアームドギアを構えなさい。それは常在戦場の意思の体现。あなたは、何ものをも貫き通す無双の一振り、ガングニールのシンフォギアを纏うのであれば。胸の覚悟を構えてごらんなさい!」

「か…覚悟とか、そんな…私、アームドギアなんて分かりません…分かってないのに構えるなんて、それこそ全然分かりません!」

翼の言葉に響も言い返す。アームドギアとは何なのか。分かってないのに構えろだなんて。翼の言っている意味が分からなかった。しかし、この時彼女まだ分からなかった。自分のアームドギアが既に自分の腕にある事を。響の言葉に翼は背を向けると歩み始めた。「覚悟もないのに…このこと戦場に立てると思うな!!」

その言葉と共に翼は大きくジャンプし、刀を響目掛けて投げつけた。すると刀は巨大化な剣と化す。更に翼の後ろからの蹴りと共に剣は勢いを増す。

これは翼の技の1つ、天ノ逆鱗。今まさに響の言葉が翼の逆鱗に触れた事で放たれた。そして剣が響に命中するその瞬間……

『ゼエア!』

その刃を咄嗟にトリガーが受け止めた。そして刃ごと殴り付ける。

「……トリガーさん」

「てつきりさつきと帰っちゃったのかと思ったぜ」

響と奏がそんなことを言ってるがトリガーは無視した。なぜなら、トリガーの視界には現在翼しか入っていないからだ。

「くっ……なんとつもりだトリガー!」

『……ゼエア!』

足を蹴り目にも止まらない速度で翼の目の前に現れると、その無防



備なお腹目掛けてアッパーを繰り出す。

「ぐう!？」

それにより翼の身体が浮かび上がる。そして今度は下に向けて拳を振るう。

「がはっ!」

勢いよく地面に叩きつけられ肺の中から酸素が抜け出す。だが、トリガーの攻撃はまだ終わらない。倒れて動けない翼の髪を掴み上げると、膝蹴りを食らわせる。

「トリガー!! もうやめてくれ!」

「これ以上は翼さんが……」

二人が必死にトリガーを止めようとするが、トリガーはそれを振り払い翼を殴り付ける。

これで最後。そう言いたげにトリガーは拳に闇を纏わせる。

それ以上は死んでしまう。そう感じた響は、

「……それ以上はやりすぎです! まだやると言うのなら、私が相手になります!」

トリガーの前に立ち塞がった。だが、トリガーは響のことなど視界に入っていないのか、遠慮なく拳を振り下ろした。

「あのバカッ!」

奏もトリガーを止めようと槍を構えて走り出すが、それよりも早く赤いなにかが通りすぎた。

「ふん!」

赤いなにかはトリガーの目の前に現れると、その顎に向けてアッパーカットを繰り出した。

『……ッ!』

突然殴り付けられたトリガーは重力など関係ないかのように吹き飛ばされる。

「え? 何がどうなって……」

「……叔父様!？」

「子供を守るのが大人の務めだからな」

「遅いって全くよ……」

突然トリガーを殴り付けたのは、翼達奏者がノイズと対抗するためにある秘密組織特異災害対策機動部二課の指令風鳴弦十郎だった。

思った以上に思い拳をぶつけられたことでトリガーは正気に戻った。トリガーは警戒するように弦十郎を見つめる。

「トリガー、だったか。君がなんの思惑があつてこんなことをするのかは俺にはわからん。だが、今からは俺が相手をしよう」

『……お前、本当に人間か？ 何をしたらそんな化け物じみたことができるんだ……』

「知らないのなら教えてやろう。飯食つて、映画見て、寝る！ 男の鍛練はそれで十分よ！」

『ええ……』

トリガーは引いた。ガチでドン引きした。

『……はあ。興が冷めた。今日のところは引き下がる。だが、一つだけ言っておく』

「なんだ？」

『たとえ認められなくても仲間にも刃を向けるそいつに、人を守る資格はない』

そう言うのとトリガーの身体は闇に包まれその場から消える。

トリガーがいなくなった瞬間、弦十郎は先ほどアッパーカットを行つた右手が震えていることに気づく。

（俺が怯えているだと？ なるほど……奴はそれほどの実力者と言うわけか）

これは思った以上にヤバそうだ。そう感じた弦十郎はいまだに起き上がる事が出来そうにない翼の元へ向かう。

翼は泣いていた。自分の実力が全く通じる所か、動くまもなく叩き伏せられたことに。

防人として幼い頃より鍛練を行ってきた翼が、初めて感じた敗北だった。

そして、その様子を最初から最後まで見ていた者がいた。

『ようやく見つけたぞ！ 我が好敵手よ！』

## 第四話 「約束と未来の ■■■」

「これはかつての地球の記憶。」

『あああ！・ 全くイライラするねえ！』

金と銀を貴重としたスタイルのいい巨人の女性が怒りに身を任せて建物を破壊していた。

巨人の名は妖麗戦士カルミラ。二つ名からわかる通り妖艶でスタイルがいいナイスバディな闇の巨人の一人である。

『……何を怒っている？』

『トリガー!! あたしに会いに来てくれたのかい!?!』

たまたまやって来た惑星で破壊活動を行っているカルミラを見て、つい声をかけたトリガー。カルミラは声をかけたのがトリガーだとわかると、先ほどの怒りなど忘れたかのように甘い声を出す。

『聞いておくれよトリガー! ユザレのやつ、最近アンタを見る目に色気がある気がするんだよ!!』

『……気のせいだろう。この世に俺を好む物好きなど存在するわけがない』

『相変わらずだねえ、アンタは。それじゃあ、あたしやシエム・ハはとびっきりの物好きになるじゃないか』

カルミラは呆れた。どこまで女心のわからないトリガーに。

トリガーは自分に対して無頓着である。だからこそ自分に向けられている好意に気づかない。

『この様子じゃあ、ユザレもシエム・ハも、そしてあたしも……恋を实らせることが出来そうになさそうだねえ』

思わず天を仰ぎ見たカルミラ。その様子を見てトリガーは首を傾げる。

本当になにもわかっていないようだ、この鈍感野郎め。

『さて、あたしは行くよ。アンタも遅れるんじゃないよ!』

『……ああ、わかった』

そう言つてカルミラが空の彼方に消えていくのを眺めていたトリガーは、俯くとボソツと誰にも聞こえない声で呟いた。

『……いつかは滅ぼす地球人の想いに応えたところで、意味などないだろうに』

その呟きが意味すること事とは一体……？

「それは本当か？ 了子くん!!」

「ええ、本当よ。だからそんなに顔を近づけながら叫ばないでちょうだい。頭に響くから」

リディアンの地下にある秘密組織特異災害対策機動部二課。その研究室にて、自身でできる女と自称する女性——櫻井了子が語った言葉に、人類を越えていると言われても仕方ないほぼ超人——風鳴弦十郎は驚愕の表情を浮かべる。

「貴方が驚くのは仕方ないことよ。なにしろ、今まで貴方が勝手に仲間だと思っていたトリガーは、かつてあらゆる惑星を滅ぼした闇の巨

人なのだから」

「だが、俺があの時対峙したときはそんな様子を見せなかったぞ？」

「私にもわからないわ。あくまでも調べた限りでのトリガーがそんな感じだった、ってだけだから」

思わずといった様子で椅子に座り込む。

その様子はとても疲れていてまともに寝ている様子がなかった。目に見えるほどくつきりと目の下に隈ができている。

「トリガーについてはわからないことが多すぎるの。今後もなにかないか調べてみるつもりではあるけれど、あまり期待しないでね」

「そうか、わかった。だが、君も倒れそうなほど研究室に籠るのはやめるんだ」

「それぐらいわかってるわよ」

了子は弦十郎が部屋から出ていったのがわかると、この前メデイカルチェックした響の資料を見る。だが、その瞳は金色に輝いていた。「なぜ、今になって姿を現したんだ……トリガーよ。まさか、ユザレの覚醒が近いのか……？　だとしたら一体誰がユザレの遺伝子を持っているというの？」

ぶつぶつと呟きながら了子は——いや、終わりの巫女フィーネは部屋を出ていった。

怒りに任せて翼をフルボッコだドンにしてから数日が経った。

色々調べた結果、風鳴翼はかなり防人として生きていることがわかった。

幼い頃から防人として生きてきた影響なのか、響のようにただ人を助けたいと言う偽善からくる行動が理解できなかつたのかもしれない。

立花響は度が過ぎるほどのお人好しだ。それはもうお節介レベルだ。過去に彼女はライブ事件後、生き残ったというだけで様々な人たちから理不尽な悪意を叩きつけられた。

その影響で家族関係も崩壊している。なのになぜ、響がまだ笑顔でいられるのか？

そんなの決まっている。

「それで、俺に相談したいことってなんだ？」

誰もいない（俺とおばちゃんを除く）ふらわー店にて俺の目の前に座る大天使こと小日向未来こひなたみくがずっと彼女の隣にいたからだ。

「最近、響の帰りが遅いんです。理由を聞いても答えてくれないし」

「……そうか。逆に聞くけど、何で俺に相談を持ちかけたんだ？」

「……恥ずかしい話なんですが、響関連のことで相談できる人が闇塚さんしかいなくて」

本当に恥ずかしそうに言うのはやめなさい。頬が少し赤いぞ。

さて、突然になつてしまうが……俺と未来、そして響は顔見知りだ。

と言っても、二人ほど仲良しって訳じゃない。たまに買い物に付き合つて荷物持ちもをしたり、未来か響のどちらかと外食をする程度だよ（世間ではそれをかなり仲良しと言う。相変わらずの鈍感野郎め）。

「なるほどな……なら、今度来たときにそれとなく聞いてみるよ」

「ありがとうございます。それと……今度響と一緒に流星群を見に行くんですが、一緒にどうですか？」

「流星群？」

「はい」

流星群ねえ……セレナも連れていきたいけど、絶対頷かないよなあ。あいつ俺以外の人間恐怖症らしいし。何で俺は大丈夫なのかは知らないけど。

まあ、流石にノイズが現れることはないと思いたい。

「……わかった。なら、その日に連絡くれ」

「……っ！ はい！ ありがとうございます!!」  
めっちゃ嬉しそうだな未来さん。

「それでは、今日はありがとうございました!」

うん。笑顔で出ていったな……さて。

「あいつがやけ食いた分のお金……俺が払うのか」  
「当たり前だよ」

急に喋らないでくれおぼちゃん。マジで怖いから。

やった！ やったやった！ 闇塚さんを流星群に誘うことができ  
た!

ふふふ。響に教えたらなんて顔するかなあ。楽しみだなあ。

「大好きですよ……闇塚さん」

今から二年前。私あげたチケットで響がライブに行ってから事  
件は起きた。

響が退院して一緒に学校から帰っている途中、私たちは拐われた。

「へへへ。悪く思うなよ。全部全部全部全部全部全部全部全部全  
部全部全部ぜんぶう!!!」 その女が悪いんだからなあ!!」

そうやって私たちを拐った集団のリーダーが響の腹を蹴りつけた。

「かはっ!」

「っ!! やめて! 響になにもしないで!」



そう言っても何度叫んでも、彼らはやめてくれなかった。響が泣きそうな声をあげる度に嬉しそうに蹴りつける。

時々殴ったりもしてた。私は心の中でどす黒い感情が募るのが自分でもわかる。

響が動けなくなったら今度はその矛先が私にも向いた。

私も響と同じように殴られたし蹴られた。身体中にアザができたし血も流れた。それでも私は泣かなかった。絶対に声をあげるもなかった、歯を食い縛った。

「やつは最後は犯さねえとなあ?」

その言葉を聞いた途端、私の中でゾツと冷えたのがわかる。

「い、いやあー!」

まだ好きな人もいない。なのに、そんな下らないことで犯されるんだと思うと急に恐怖心が湧いてきた。

でも、その恐怖が現実になることはなかった。

「な、なんだ!? てめえは!?!」

急に集団の奥からそんな声が聞こえた。そして吹き飛ばされる人たちも。

「お前らか……その二人を拐ったって言うのは」

その人はとても不思議な人でした。

目元まで伸びた黒い髪、髪と髪の間から見える金色の瞳、そして黒を貴重とした服装。

その人が、私たちを助けてくれた命の恩人闇塚健吾さんだった。

「へっ!一人で乗り込んで来るなんてよお。バカだろう! てめえら殺っちまええ!!」

リーダーの言葉を聞いた人たちが闇塚さんに向かっていくけど、その人たちはみんな返り討ちになった。攻撃のすべてを闇塚さんはギリギリのところまで避けてカウンターをしてたから。

そしてたった数秒で闇塚さんは二十人近くいた集団の人たちを倒した。

「で? あとはお前だけだぜ?」

闇塚さんが威圧感を込めて言うと、リーダーは集団の人たちを置い

て逃げていった。

「大丈夫か？　すぐに助けに来れなくてごめんな」

本当に申し訳なさそうに闇塚さんは私たちの手当てをしてくれる。と言うかどこから救急箱出したんだらう？

「本当はもつと早く来るつもりだったんだが……思った以上にアイツらしつこいぐらいに用意周到だったんでな」

苦笑いを浮かべている。それほどまでに走り回ったんだらう。彼の様子からわかった。

「さて、どっちを背負えばいいのか……」

響と私を見比べながら困ったように頬を掻いている。

「私は大丈夫です。響を……響を、お願いします」

その言葉を最後に、私は意識を失った。

そして、私は病室で目が覚めた。

響は既に目が覚めていて、今回の事件に巻き込んでしまったことに泣きながら謝ってきた。

闇塚さんは結局響を背負って私を片手で抱えて病院まで駆け込んできたらしい。

その日から、私は闇塚さんに恋心を抱いたんです。

## 第五話 「奪われし鎧と筋肉。パワー〜！」

これはかつての地球の記憶。

『ゼエア！』

『テエア！』

あらゆる全てを破壊すべく暴れまわるトリガー。その理不尽な破壊に抗うため押さえ込もうとする光の巨人ティガ。

最強の光と闇が殴りあうことで世界が振動する。

それは遠くから逃げながら眺めていた人たちにまで、戦いの余波は伝わってくる。まるで滅亡の瞬間を表す戦いに人々は絶望した。

ティガが地球に現れる頃には、他の光の巨人は全て殺されてしまった。

地球を壊すべく現れたガタノゾーアの手下怪獣までもがトリガーに殺されてしまった。

トリガーは光も闇も破壊した。自分以外の存在を許さないというばかりに破壊していた。

トリガーとティガが光線を放つ。

赤黒い色と青白い色のゼペリオン光線がぶつかる。お互い一步も引かずに撃ち続けるが、次第にティガのゼペリオン光線が撃ち負けてしまい、ティガは大きく後ろに吹き飛んだ。

ティガは建物を破壊しながら落下する。

トリガーはティガの元まで走ると、その首を掴み上げ腹を殴り蹴りそして投げる。ティガの胸にあるカラータイマーが赤く点滅する。

人類はまた絶望した。最強と呼ばれた光の巨人が、同じく最強と呼ばれた闇の巨人になすすべもなくやられる様を見たから。見てしまったから。

『グ オ オ オ オオオオオオ ア ア ア ア ア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

トリガーが雄叫びを上げる。

「悲しそう」

その叫びを聞いた青髪の少女が呟いた。

「ああ、確かに悲しそうなメロディを奏でてるな」

その隣にいたオレンジ色の髪をした少女は同感した。

「私たちでは、あの人を救えないんですね……」

茶髪の少女も悲しそうにそう呟いた。

『テエア……』

苦しみながらもティガは立ち上がるが、すぐに膝をついてしまう。

そしてカラータイマーの光が点らなくなると同時に、ティガは光となって消えていった。

もう誰もトリガーを止められる者はいなくなった。トリガーは勝利の雄叫びを上げると、最大限にまで溜め込んだゼペリオン光線を放った。

ゼペリオン光線はまだ原型を保っていた建物等に襲いかかり、本来の意味で古代都市は——ルルイエは時代から、大地から消え去ってしまった。

「ふくん、流星群……ですか」

ああ、今日もなんか機嫌が悪そうだなあ。

「そうですかそうですか……私という可憐で大人しい美少女と同じ屋根の下で過ごしているというのにも関わらず、どこかの馬の骨かもわか

らない女と見に行くんですか？　へえ、いい度胸してますよね？」

め、めんどくせえ……。おかしいな？　セレナってこんなにも面倒くさい子だったっけ？　まだ出会った頃の方が刺々しかったけど素直ではあったぞ。

「だ、だから一緒に見に行かないかって……」

「行きませんよそんなの。そもそもここに住むにあたって最初に言ったじゃないですか。私は外に出るのが怖いと」

「いや、読書の皆さんは知らないと思うけど……」

「黙ってください！　そんなメタ発言は聞いてませんよ!!」

じゃあ、どうしたらいいんですかねえ？　これがもしかして噂に聞く女心ってやつかな？　そんなの俺にもわからないよ……。

「まあもういいです！　勝手にその、小日向未来って女と流星群を見に行ったらしいじゃないですか！　私はもう知りません！」

怒鳴りながら階段を駆け上っていったぞあの子。さてさて、どうしようか？

約束は破りたくないけどセレナの様子も気になるしなあ。

仕方ない。流星群見に行くかあ……。とても気分が重いけど。

「闇塚さん、今日は来てくださってありがとうございます！」

「ああ、お礼なんかいらないよ」

「でも、無理言ってしまいましたし」

自分でもそう思ってたんなら最初から誘わないでほしかったかな……悲しいかな、男の俺にそんな台詞は言えないんだよ。

だって絶対未来は悲しむと思うからな。未来が悲しめば響が知るだろう。そうなれば最近鍛え始めた彼女の全力パンチが飛んでくる。

でもね、俺としては遠くの方でノイズの気配がしてるからそつち行きたいんだよね。未来がいるから行かないだけで。

「本当なら響も来る筈だったんですが……急に予定が入ったみたいで」

知ってます。だって遠くの方で二人分の GANG ニールの気配を感じてますから。なんか荒れてるのがわかるから。よほど未来と流星群が見たかったんだろうね。どす黒い感情に支配されかけてますよ。

「別に大丈夫だよ。急に予定が入るなんて普通だろ」

「いや、急に予定が入るのは普通じゃないと思いますよ？」

ああ、やつぱり？

俺も時たま急に予定(主にノイズ退治でね)が入ることがあるから、おばちゃんには頭が上がらないよ。仕事中であつてもノイズが現れたら……普通逃げるよな？ 何で逃げないの店に来てるお客さん達。

「で、でも……二人つきりというのもなんだかドキドキしますね」

「そういうものか？」

「もう、そういうものですよお」

何で頬を赤らめるのかは知らないが、今日は綺麗な夜空だな。え？  
現実逃避？ なにそれ美味しいの？

「なら、後で響も見れるように動画でも撮っておくか？」

「あ、いいですねー！」

流石に一人見れないっていうのも可愛そうだからな。

——トリガー。綺麗なんだね、こんなにも夜空って

——そうだな。人間はこの夜空を愛しているんだぞ、知っていたか

■■■？

昔の記憶が掘り起こされるな……今アイツが何してるかは知らないが、たぶん今でもどこかで勘違いされるような事を言っているんだろうなあ。

「どうしたんですか？」

「ん？ ああ、ちよつと旧友の事を思い出してな」

「ええ!? 闇塚さんって友達いたんですか!？」

「それはどういう意味かな？」

『見つけたぞ！』

突然空から赤い鎧が落ちてきた。全く誰だよ……って、お前は——

『久しぶりだな』

「お前か……ダーゴン」

剛力闘士ダーゴン。俺が闇の巨人として活動していたときに仲間だった力の巨人。

おかしい。お前は俺が封印したはずなのに。

「封印はどうした……？」

『相変わらず口数が少ないようだな』

「人の話を聞かないのは変わらずか……面倒だな」

後ろには未来がいる。目の前で変身するわけにはいかない。かといつてこの場を離れて変身しても怪しまれるだろう。未来は頭が賢いからな。ちよつとした理由があればすぐに俺の正体に気付くだろう。

「……仕方ないか。おい未来」

「は、はい!？」

「俺が今からすることについて……なにも聞かないでくれ」

「え？ それってどういう……？」

疑問だらけになつてる未来を無視して俺は懐からブラックスパークレンスを取り出すとトリガーダークキーを起動させてブラックスパークレンスに差し込む。

「未来を染める、漆黒の闇……トリガーダーク!!」

俺の姿がトリガーに変わる。

「え？ 闇塚さんの姿が……ええええええ!？」

後ろで未来がかなり驚いているのがわかる。だが、後ろを気にしている余裕は今の俺にはない。なぜなら、

『ふんー!』

『ぐっ……この!!』

トリガーに変身した瞬間ダーゴンが殴り付けてきたからだ。まあ、咄嗟に握った拳で殴り返したけどな。

『ふむ……腕は鈍る所か以前よりも増してあるようだな。我は嬉しいぞ!!』

『こんの……』

相変わらずの戦闘狂過ぎるだろ。

『お前が復活したという事は……他の奴等も』

『ああ、そうだ! 3000万年前、地球を滅ぼすと決めたお前によつて我ら三人は封印された!! だが、その封印ももう解けたのだ! 今頃はカルミラやヒュドラムも地球に来ているであろう!』

面倒なことになったな。

■■■■の願いを叶えるためには、カルミラ達が邪魔だった。だから



かつて俺は、アイツらを火星に封印した。

それが今、こうしてこの地球に現れるというのであれば……

『……今度は生き返ることができないように殺す』

『なぜだトリガー!!  なぜ、あの日、地球の文明を破壊し滅ぼす際、たった一人だけで行つたのだ!  なぜ我らを頼らなかつた!?  我はお前の好敵手ではあるが、仲間でもあるはずだろう!』

『……うるっさい!!』

拳に闇を纏わせてダーゴンを殴り付ける。何度も何度も。

イライラする。昔の事を……!!

『かつての話で、俺に話しかけるなああああああああああ!!』

殴つてダーゴンを吹き飛ばしたあと、赤黒い雷を放電する。それによつて周囲に電撃が散らばるがどうでもいい。

『アアアアアア!!』

まるで野獣のように叫びながら飛びかかる。両手でダーゴンの頭を叩きつけ、そのまま膝で顔面を蹴り上げる。

『ぐう……』

『アアアアアア……』

ダーゴンは吹き飛ばされないように踏ん張ると、殴りかかった俺の拳を受け止めた。

『正氣に戻らんか!  我が闘いたいのは暴れまわるお前ではない!』

そういつてダーゴンは俺を殴り付けた。それだけで、俺はどこか遠くの場所まで吹き飛ばされた。

ドガアーンツ!!

そんな音と砂埃を上げながら俺は落下した。未来と流星群を見に来たときからずっと感じていた響達の気配の場所に。

「な、なんだ!?!」

「何事か!?!」

声からしておそらく防人……翼がいるんだろな。気配で知っているし。

俺は痛む身体に鞭を打つようにしながら起き上がる。

「と、トリガーさん!」

「へえ、今日のあたしは運がいいな! なにしろ、フィーネから言われていた二人を連れ帰ることが出来るんだからな!!」

響がなにか驚いているように感じられるが、今の俺には聞こえない。だって、さつき聞こえたから。

フィーネとなあ!! その名が聞こえてしまったてはからには生かしておくわけにはいかない。

『フィーネ、だど? 誰だ、やつの名を言った奴は……?』

立ち上がった俺は、周囲にいる女どもに問いかける。だが誰からも返事は返ってこない。仕方ないな。

『二人一人、殺してでも聞き出すしかないか?』

「!?!?!」

何をそんなに怯えているのだろうか? 怯える必要ないだろうに。

「へ、へっ! ちよつと見た目が強そうだからって調子に乗るな!」

さつきまで翼と戦っていた銀髪の女が鞭を伸ばしてくる。俺はそれを掴みとろうとしたが、

『やめんか!』

俺を追ってきたダーゴンによって止められてしまった。

「な、なんで止めるんだ! そいつを連れ帰ってこいつでフィーネに言われてんだぞ!」

『そんなことはわかっておる! だが、今の奴にちよつかいをかけるのはやめておけ。死ぬ必要のない命を散らすこととなるぞ』

「なんだと……!?!」

そうか。お前は蘇ってフィーネ側についたのかダーゴン。なら、

『貴様らを……殺す』

いまだに叫びあっている二人に向けてゼペリオン光線を放つ。躊躇? 遠慮? 必要ないな。あの二人はフィーネの敵だ。3000万年前からフィーネは俺たちの敵だったというのにな。

『ぬうー!』

ちっ。ダーゴンが盾になりやがったか。アイツは力だけじゃなく防御も高いから一度や二度ぐらいなら俺の全力で放ったゼペリオン

光線を耐えることができる。

『今は撤退するぞ』

「はあ!? なんぞだよ!」

銀髪の女がなにか喚いているが関係なしにダーゴンが抱えると背後に闇を産生み出してその場から消える。

『仕留め損なつたか……』

「トリガー……なんなんだ? あの、赤いやつ」

『奴か? 奴は……』

響と一緒にノイズ退治をしていた奏が話しかけてくる。忘れてないといいが、この場にはなぜか空気を読んでもくれない女がいることを忘れてないか?

「話の途中ですまないが、トリガー。貴様には聞きたいことが山ほどある。私たちに着いてきてもらうぞ」

「翼あ、お前さあく本当にそういうとこだぞ」

奏が呆れた声を洩らす。

『前にも言ったが、俺にはお前達に着いていく理由がない。帰らせてもらう』

「帰すわけにはいかんだ! こうなってしまうては仕方がない! 実力行使にでる!」

マジか。俺絶対後でMIKUSANとなった未来さんにも詰め寄られるかもしれないだからな。こんなところで無駄な時間を使いたくない。

それに、帰るのが遅くなってしまうえば家で一人寂しくご飯を食べているであろうセレナが怖い。

〜その頃のセレナ〜

「なんかイラッてした。健吾さんがまた変なこと言ったな? お仕置  
きが必要かなあ?」

『帰りたくないなあ』

「何をぼそぼそと!!」

あ、危ない!! お前な、俺だからいいものの他の人だったら真つ二つだぞ!?

なんか翼見てたら、さっきまで怒ってたのがバカらしく思えてきた。

それよりも、この状況どうしようか……??

## 第六話 「剛力闘士ダーゴン」

「あーくそ！　なんで止めたんだよ！　答えろ、ダーゴン!!」

我は今とても困っている。目の前で醜く喚き散らすクリスを見てどう答えたものかと考えている。元より我は考えることが得意ではない。

トリガーのように状況を瞬時に把握して戦闘を行うわけでも、ヒュドラムのように前もって罠など策略を廻らせて行動する訳でもない。ただ、この力の限りを尽くして破壊するだけだ。我にできるのはたったそれだけ。

「あのトリガーとお前は昔は仲間だったんだろ!?　なんで殴りあう必要があるんだよ!!　意味わかんねえ!」

『そう言われてもな。我とトリガーは昔から殴りあうことで互いに高めあってきた。今さらそれを変えることなどできん』

「……脳筋過ぎんだろお前」

失礼な！　我のどこが脳筋だというのだ!!

「はあ……まあ、過ぎたことを気にしても仕方ねえか」

なぜため息を吐くのかはわからんが、気にしないでくれるなら我もこれ以上考えなくてすむ。

「随分と楽しそうね」

突然現れるでない。心臓に悪いぞ。

「っ!?　ふ、フィーネ……」

『なんのようだ、終わりの巫女』

「その名で呼ぶな、筋肉バカ」

トリガーもそうだが、なぜみんなして我の事を筋肉バカ等と呼ぶのだ!!　なぜ我ばかりがそんな呼ばれ方をされなければならんのだ!!

——お前がバカだから。  
——エクセレント!! 流石ですねトリガー。  
——エレガント、エレガントうるせえよ。頭がち割るぞ。  
——凄く物騒ですねえ!? 私何かしました!? あとエレガント  
じやなくてエクセレントですよ!?

誰がバカだ!!! 断じて我はバカなどではないぞ! 少し考えるのが苦手なだけだ!! それだけだ!

『それで、本当になんのように?』

「本当ならクリスだけに用があつたんだけど、まあいいわ。数日後、奏者達がデユランダルの護衛につく。そやつらからデユランダルを奪ってこい」

なんだと?

『我に、そのような誇りもない醜い事をせよと言うのか?』

「そう言うだろうと思って、初めからクリスにだけ頼もうとしていたのだ」

『何が頼もうとしていた、だ!! この娘が了承すること以外は認めない貴様が、よくもまあそのような戯れ言をほざく事ができるな!!』

我は怒っている。そう、これだ! こいつのこういふところがトリガーの怒りに触れたのだ。

かつてエンキと共に居たいがためだけに闇の一族と共に旅していた我らを裏切った終わりの巫女を、長年仲間として一緒にいた我らが驚くほどトリガーは激怒して殺しに向かった。

結果的に終わりの巫女は、何度も何度も蘇ってきて我らの邪魔をする度にトリガーに殺された。ゆえに今現代の終わりの巫女 of 精神はともじやないが正常とはいえないほど壊れている。

かつてあつた人としての心を亡くした終わりの巫女は、偶然拾ってきたらしいクリスをまるで与えられた壊れやすい玩具のように扱っ

ている。

我にはそれが許せん。クリスはまだ子供だ。本当であればこのよ  
うな戦いに参加させるべきではない。

『そもそも、我はまた一度トリガーと会うために物凄く泣きながらし  
がみついてきたマリアに心を痛めながらも日本に来たのだぞ!! 貴  
様に手を貸してやっているのも、前のようにクリスに必要なない傷を  
負わせないようにするため!! 貴様はあの奇妙な鎧をクリスに無理  
矢理つけさせ身動きがとれなくしてから何時間も電撃を浴びてただ  
ろう!!』

「必要だったから浴びさせたまでのこと。必要あれば私の行動に口を  
挟まないと約束したのはダーゴンの方ではないか？ 貴様は誇りあ  
る闇の一族だろう?」

『ああそうだ！ そうだとも！ だが、本当に必要なのか!!』

このままでは埒があかない。やはり我にはトリガーのようにはな  
れんようだな。

「もういい！」

『ぬ!? どうしたクリス?』

「もういいよ。アタシのために怒らなくても」

『だがなあクリスよ』

「戦争をなくすためにアタシが自らお願いしたんだ」

そう言われてしまったてはなにも言えなくなるではないか。だが、な  
らばなぜそんな悲しそうな顔をするのだクリスよ。

我はクリスを守らねばならんだ。この命に変えてもな。約束し  
たから。

——アンタがフィーネの言っていたダーゴンってやつか？

——アタシは雪音クリスって言うんだ。よろしくな！

——え？ フィーネのあの電撃は怖くないのかって？ 戦争をな

くすためならあんなのいくらでも耐えてらあ

——な、なんだよ。アタシを守ってくれるってか？ばあか、そんな台詞はもつとアタシから信頼レベル上げてから言いやがれっつてんだよ／＼／ 恥ずかしいだろうが！

いつかは我もマリアの待つあの場所に帰らねばならん。だが、それまでの間、守ると約束したからには守る。

「はあ……まあ、好きにしなさい。デュランダルさえ奪ってきてくれるのならやり方は問わないわ」

『言われなくても』

いつものことながらどうやって消えたなのだ終わりの巫女は。

『こうなってしまったからには仕方なしか。デュランダルを奏者供が守っていると言うことはトリガーも来るであろう』

「お前本っ当にトリガーに対して執着するよなあ」

『この程度で何を言ってる？ 我の知る限りトリガーに関してならカ  
ルミラと■■■■の方がよっぽど執着心というか愛というか重いぞ  
？』

「マジかよ……頭狂ってんじやねえのか？」

『……それについては同感だ』

珍しく意見があったな。まあ、そんなことよりもデュランダルの事を考えねばならぬか。

次会うときはトリガーは本気で殺すつもりで我らと敵対するだろう。正直怒り狂ったトリガーとだけは戦いたくない。むしろ会いたくない。

なぜいつもいつも我は盾代わりにならねばならぬのだろうか？

全くもって意味がわからんぞ！



## 第七話 「デュランダル争奪阻止」

「これはかつての地球の記憶。」

「トリガー……」

『……ユザレか。俺に、なんのようだ？』

古代都市ルルイエを眺めていたトリガーの隣に、白いドレスを着た白髪の少女——ユザレが座り込んだ。

「貴方は、どうしてルルイエを滅ぼさなかったのですか？」

『……ただの気まぐれだ。それ以外に意味などない』

「本当に？」

『ああ、本当だとも』

トリガーに寄り添うに近づいたユザレは、そっと腕に抱きつく。

「貴方のことを町の皆が話していました。私の事が好きだから、トリガーはルルイエになにもしなかったんだって」

『それはあり得ないな。俺に恋愛感情など存在しない。それに、先程も言ったはずだ。ただの気まぐれだ、だとな』

「ですが……」

『光と闇は決して交わる事はない。君は光であり、彼らを導く聖女だろう？。俺は闇の一族だ。不可能なんだよ』

そう言っつてトリガーは立ち上がると、顔を俯けるユザレを無視して歩き出した。背中に聞こえる少女の鳴き声に胸を痛めながら  
……………

「はあああああああ!!」

『ふん!』

翼の放つ斬撃を片腕で受け止める。軽い。

『……』

「くっ、刃が通らない! なら、無理矢理にでも通すまで!」

おいおい。無理矢理なんかしたらアミノハバキリが可哀想だぞ。

俺は今防戦一方になっている。理由? そんなの今攻撃したら力を押さえられなくて殺してしまうかもしれないからだよ。

『……無駄だ。今のお前では、俺に傷一つ付けることも不可能だ』

「くっ! なぜ貴様がそう決めつける!」

『知っているからだ。かつて貴様の血の者と刃を交えたことがあったが、俺が唯一勝てなかった人間がいたことを。その人間と比べれば、お前の太刀筋は生ぬるい』

「なんだと?」

翼の太刀筋を見て思い出したんだ。俺が昔殺しあったあの男の事をな。まあ、結局あの男は俺を殺さずに終わったけど……。

——なぜだ! 何故それほどまでの力を持つていながらあ!!

——力だけでは、国は守れんのだ……トリガーよ。

——だが! まだ手はあつたはずだ!

——お前の言う、絆だけではなにも守れんよ。この私のようにな……。

今でも覚えている。俺は救えなかった。仲間を殺され絶望に墜ちたあの男を。

あの時あの男につけられた傷と斬撃に比べれば……

『今のお前など恐れるに足らん』

「一体誰の話をしている……？」

まあ、そりゃあ戸惑うわな。行きなりそんな話をされたら。でもな、

『意思なき刀で俺に勝とうなど片腹痛いわ！』

あつ、やつべえ。古き親友の言い方が移った。

「その言葉使い……まさか！」

『ふん！』

俺は一瞬で翼の懐に入り無防備な腹を殴り付けて吹き飛ばす。勢いよく飛んでいった翼は壁にぶつかり意識を失った。

『ふう……お前達も、その娘と同じように俺に挑むつもりか？ ならば、容赦はしない』

威圧も込めてなぜか傍観に呈していた響達に体を向ける。その瞬間、響だけがビクツツとしていたが。

「いやいい。あたしは戦うつもりはないぜ。勝てる気もしないしな」

なんで笑ってんだよ……意味わからんぞお前。

「ほら、旦那が来る前にさっさと言ってくれ……あたしとしては色々話したいことが一杯だけどな！」

「あ、それ私もです！」

……………。

『……もし、俺がお前達と話す気になったらな』

響よ、嬉しそうな顔をするな。

少しでも複雑な思いを抱きながらも闇に包まれながらこの場を去った。

「いや逃がしませんよ?」

『え、ちよ!? みみみMIKUSAN!?!』

く天羽奏く

行っちゃったか。あくあ、もったねえことしちゃったねえ。

せつかく二年前助けてもらった礼を言えると思ったのになあ。

まあ、仕方ねえか。

二年前のライブの時、絶唱を使って命を散らそうとした。だけどそんな時に現れたのがアイツだトリガーった。

あたしはアイツに命を救われた。いわゆる命の恩人ってやつだな。一応響のやつも救ってくれたし。あの後病院に運ばれたあたしと響は最初から怪我なんてなかったかのように健康体だった。それはもう、医者が訝しげにあたしらを見るほどにな。

あたしはアイツに恩返しをしたい。そのためにも一緒にノイズを倒したい。まあ、うちの相方はそれを望んではないみたいだけどな。なんであそこまでトリガーに敵対心を抱くかねえ。

さて、と。もうそろそろ旦那も来ると思うし、いつまでも翼を地べ

たに寝かしておくわけにはいかねえよな。そう思ったあたしは後ろであたふたしている後輩を連れて翼を起こしにいった。

く 闇塚健吾もといトリガーく

「なるほど。つまり闇塚さんは実は何千万年も昔の人で、今もこうして生きている人なんですネ？」

今俺たちは流星群を見る予定だった場所にいる。目の前にはなぜか鬼の仮面（いやワリとなんでだろうね？）を被ったMIKUSANがいて、俺は正座させられながら自分の事を説明している。

「まあ、色々と説明を省いたらそうなるね」

いやあ、セレナちゃんの時も思ったけど、一回で説明のほとんどを理解してくれるのってなんか嬉しいね。これが響ちやんとかだつたら一回一回何度も何度も細かく説明しないと理解できなさそうだからね。

たった一回の説明で理解してくれるなんて……俺にできない事を平然とやってのけるッ！ そこにシビれる！ あこがれるウー！

「張った押しがいいですか？」

「申し訳ありませんふざけすぎました命だけはお助けくださいこの通りですMIKU様あ!!」

「え？ 今なんでもって言いました？」

「んなこと一言も言ってねえよ!! なに都合よくしてるんだ？」

「てへぺろ♪」

くそお、可愛いな！ 思わず許してしまいそうだ。だが！ 俺はこの宇宙よりも広く何よりも硬い精神力で迎え撃つのさ！

一人でやって悲しくなってきた。三千万年前の俺はこういったボケはしなかったからな。なんだろうな……暗黒勇士トリガーとしてのなにかを失いそうで怖い。

この身体の元となったアイツせいなのか？ まあ、気にしないでおくか。

なんか疲れたな。早く帰らないとセレナちゃんも怒っているだろうし……帰りたくないなあ。

「じゃあ、取り敢えず帰ろうか？」

「そうですね。もう響も帰っている頃だと思うので晩御飯を作らないと……」

なぜか未来は嬉しそうにしながら、そして俺はゲンナリしながら帰路についた。

数日後……………

はいどうも皆さん。トリガーだよ。

只今俺はなぜか無限に襲ってくるノイズに対処しながら、膨大なエネルギーを秘めたなにかを乗せた車を追っている。

と言つても先程言った通りノイズが無限と言つてもいいほど沸いてきやがるからそっちの方で忙しくて中々追いつけない。

こんな場所でゼペリオン光線を撃つわけにはいかんからな。ハンドスラッシュとかでなんとかなつてる感じだ。

そしてノイズ狩りに専念してから暫く経った頃、なぜか急にノイズが現れなくなった。だから俺は膨大なエネルギーが秘められた場所に向かうことにした。

見つけた。やはりダーゴンと白い鎧の女も来ていたようだ。ダーゴンは手を出していないみたいだが、俺には関係ない。アイツからしたら少し卑怯かもしれないが後ろからぶん殴らせてもらおうか！

『ふん！』

『おわつと！ 危ないではないか我が好敵手よ！』

ちっ！ 避けんじゃねーよ！

『だがまあ、お前を信じて待っていた甲斐があったというものだな』

『……殺す。フィーネの味方をすると言うのなら殺してやる』

覚悟しろよダーゴン。フィーネの味方さえしていなければ命だけ

は助けてやろうと思っていたのに。ああ、でも再会したときに『……今度は生き返ることができないように殺す』って言ったな俺。ごめんやっぱり殺すわダーゴン。

『おらあー！』

『ぬんー！』

硬ッ！ やっぱこいつ硬いな。いやになるほど硬いわ。流石闇の一族随一の防御力を誇るだけのことはあるな。

まあ、だからといって怯ませることができないのかって言われると違うんだけどさ。

『……………』

『ぬおお！』

かつて俺に挑んできた最後の光の巨人から奪った赤き力のエネルギーを身体全体に巡らせながら殴り付ける。それにより先程まで一歩も動かなかったダーゴンの足が少しずつ後ろに下がっていく。

俺はダーゴンの腹を蹴りつけると後ろに大きく飛び上がりゼペリオン光線を放つ。赤黒いゼペリオン光線はダーゴンの胸板にぶつくと爆発しダーゴンをぶつとばすことに成功する。

『ぬおおあー！』

「な、ダーゴン!？」

ぶつ飛んだダーゴンは丁度奏達が戦っていた場所に落ちた。その背中に落下した俺は躊躇いもなく踏みつける。

『ぐおおー！』

首を掴み持ち上げる。軽いな。かつてもそうだが、

『俺はまだまだ全力を出していないのに……がっかりだよダーゴン』

「あ、あれで全力じゃねーのかよッ!!」

うるせえよ。騒ぐなガキが。

片手でハンドスラッシュを放つ。

「うおー！ 危ねえなー！」

知るかそんなこと。

破壊だ。破壊こそ全てだ。そうだろう？ 今までずっとそうしてきたじゃないか。何を躊躇う必要がある？



俺は暗黒勇士トリガー。全てを破壊する者。それが俺だ。闇の一族で最強と呼ばれた俺だ。

さあ、残酷で傲慢な破壊の時間だ――

『……今、何をしようとしていた俺は？』

気づけば辺り一面なにもなくなっていた。ダーゴンも奏者達も黒服のお兄さん達も皆傷だらけで倒れている。唯一倒れてないのは眼鏡をかけた白衣を着た女だけだ。

眼鏡の奥に見えるあの瞳の色……そうか――

『また、誰かの命を踏みにじって蘇ったのか……貴様はあ!!』

全力のゼペリオン光線をフィーネに放つ。だが、そのゼペリオン光線はフィーネが出したバリア煮よって防がれた。

『昔よりもだいぶ強化したみたいだな』

「何回も殺されれば強くなるうとするのは当たり前だろうに」

お互いに睨み合う。コイツだけは生かしておけない。俺があの文  
明を滅ぼす切っ掛けとなったコイツを……ッ!!

『殺す。今ここで……グッ?!』

急に身体が痛み始めた、だと？ そうか、もう限界か。エネルギーを使い始めたみたいだな。本来なら鳴らないはずのカラータイマーが点滅してるからな。

『今日のところは生かしておいてやる。だが、貴様だけは必ず殺してやるからな。覚悟しておけフィーネ!』

そう言い残して闇となって消えたのだった。



かなり今更だけど、俺の身体は本来であれば俺のものではない。死にかけだった男の身体を借りているだけ。年齢的にも死ぬはずのない男……名前なんだっけな。確か……真永謙吾だ。まなかけんごアイツは俺が身体を借りる前まで重い病を患っていたらしく偶然外出許可が出た歩していたときに倒れたらしい。それを本当に偶然通りかかった俺（人には見えないいわゆる霊体状態）が乗り移った結果今現在借りている、というわけだ。まあ、だからといって病気が完全に治るわけではないから治るまでは俺が借りていおうと思った。

ああ、それで話を戻すけど家に連れ込んだセレナちゃんはなにやら魘されていたんだ。もうどうしたらいいのかわからなかったから咄嗟に手に握ってあげたら安心したのか息を整えて眠ってくれた。

その後セレナちゃんが目覚めるまで手を握っていたわけなのだが、目覚めた彼女がまず起こした行動は殴りかかる事だった。これには俺も驚いて左頬が真っ赤になったのを覚えている。

その後取り乱したセレナちゃんが落ち着くのを待ってからココアを作ってあげた。なにか衝撃的な事でも経験したのかセレナちゃんはその記憶を失っていたようだ。

その次の日、俺はセレナちゃんを連れて買い物に出掛けた。セレナちゃんはとても外に出るのを怖がっていたけど俺は無理矢理にでも連れ出した。

人の少ない場所ならセレナちゃんはワリと平気（健吾が勘違いしているだけで本当はセレナ表情は固まっていた）そうだった。でも人の多い場所に来るとかなり顔が青くなり突然うずくま蹲ると発狂し出した。

これはヤバいと感じた。だから人が多いのを気にしている余裕のなかった俺は、セレナちゃんを連れて巨人としての……なんか違うな、トリガーとしての能力を發揮して家まで帰った。

後に理由を聞くと頑なに話してはくれなかったけどね。だから俺は、これ以上セレナちゃんから聞き出すのをやめて家に住ませることにした。フルネームを聞いたことはないけど多分外国人だと思うし、何しろホームステイで日本に來ているとは思えなかったから。

まあ、そんなこんなでセレナちゃんが家に住むようになったわけな

のだが……。

「いつまでも恐怖に負けてはダメだよ……うん」

部屋を出る。隣の部屋が静かだからどこかな出掛けたのだろうか？ でも外に出るのに恐怖心があるセレナちゃんが何処かに行くだろうか？ 無いな。

「ようやく出てきたんですね。とても心配しましたよ」

なにかご飯でも食べようと一回に降りると、なんとあの一步も部屋から出ようとしないセレナちゃんが、ご飯を作っていた。

時計を見ると昼飯の時間なのだが……

「ご飯作れたの!？」

「まず最初に気にするところですか!？」

いやいや、普通に考えてそう思うだろうよ。

「だって君……この家に住むようになってから一回も料理作ってないじゃん」

「いやまあ、そうなんですけどね……その、あれですよ、ここに来る前までは私お料理担当だったので!」

……本当かなあ。まあ、確かにセレナちゃんは見た目からして料理作れそうだけど。なんと言うか母性って言うんだろね。溢れてんだよね。こう、落ち込んでいる人を見たら放っておけないお人好しな感じがするって言うか……何て言えばいいんだろう。

「ママからも姉さんから大絶賛されたんですよ？ 切歌ちゃんなんて何杯もお代わりしてくれましたし、調ちゃんだって喜んでくれました! どうしてウエル先生が父親のような慈愛の眼差しを向けてきたのか謎なんですけどね……」

今日はやけに喋るなあ。俺が知らない新情報がバーゲンセール中だよ。

恐らくセレナちゃんが砂浜で倒れる前にいた場所の人たちなんだろうな。その人たちを語る彼女の表情はとても柔らかい。

それぐらい大好きなんだろう……かつての仲間を捨てた俺とは違って。

そろそろ頃合いかもしれない。

「なあ、セレナちゃん」

「なんですか？」

「君がいた場所を……世界を、俺に教えてくれないか？」

突然空気が冷たくなった。さっきまで母性溢れる目をしていたセレナちゃんは、絶対零度のような冷たく暗い視線を俺に向けてきた。

「……どうして聞きたいんですか？」

「空気が重いな。」

「俺もさ、俺自身過去のことに関われすぎていると思ってるんだ。俺は最強最悪の闇の一族であり、かつて古代文明ルルイエを滅ぼした張本人……人間の身体を手に入れてから後悔しているんだ。彼女が……ユザレが言っていた絆ってやつをもっと大切にしていたらなくて」

「……」

「俺は自分の力が嫌いだよ。全てを破壊するだけでなににも守れない俺自身が！ 守る力があれば、ユザレを守れたんだって思ってる。だって、俺は最強だからさ」

自然と涙が溢れてくる。

「なんで聞いたか、だったよね。もう後悔したくないんだ。君の心に傷を追わせたままにいるのは嫌なんだ」

「……健吾さん。私、今がとても幸せなんです。向こうにいた頃では考えられないぐらい贅沢な暮らしができて、心から大切だと思える人に出会えて、そりゃあ姉さん達との思い出を忘れたわけではありませんが、私は貴方に出会えたことに感謝してるんです」

セレナちゃん……。

「恥ずかしいので一回だけしか言いませんよ？ 私は貴方を……闇塚健吾さんを心から愛しています。誰にも渡したくない。ずっと私のそばにいてほしい。それぐらい愛しています」

「……………」

「貴方には貴方の辛い過去があつて、私の想いが届かないかもしれませんが、でも、それでも構いません。私は貴方と一緒にいますから」

強いなあ君は。俺には眩しいぐらいだ。

……なるほど。君が天使か」  
「な、ななななに言ってるんですかこの変態！」  
反応がおかしいと思います。

〈特異災害対策機動部二課〉

「指令……姪っ娘さん、大丈夫ですかねえ？」

「大丈夫、とは言いづらい状況だな」

コトつと音と共に置かれたコーヒーに苦笑いを浮かべる男性に、弦太郎はため息を吐いた。

「まあ、暴走しかけだったとはいえ、トリガーに全滅したわけですからね。それもなぜか翼さんだけ症状が重いですし」

「ああ……まさかあそこまで怒ったトリガーが強いとは思わなかった。もしかしたら死ぬかもしれない、思わずそう感じてしまったよ」  
「それはないでしょう……？ 歩く絶対兵器と呼ばれている貴方がそう易々と負けるわけが……マジの話ですか？」

「大マジだ」

うつそだあ。そう天を見上げて叫びたかった。だが、人類最後の究極兵器とまで呼ばれた彼が、身体を震えさせながら言うとは誰も思わないだろう。

それこそあり得ないと、笑い話にできると、弦十朗の目の前に座る青年——蒼月隼人そうげつはやとは思った。だが、真剣な顔で語る弦十朗の様子から本当の事なんだと思えた。

「僕はここに来てからまだ短い身ですがね、それほどまでに恐ろしいと感じたのですか？」

「そうだな」

「やれやれ……OTONAは大変ですね」

「君だって大人だろう」

意味合いが違うんですよ、そう言いたかった。

「さて、俺は今から入院している翼達の所に行ってくる。君はどうする？」

「行くところがありますので結構ですよ」

「そうか、気を付けてくれよ」

わかってますよ、そう返事を返し指令室から退出する。

「全くエクセレントじゃないですよ……まあ、いいでしょう。まだ私の出番ではありません。それよりも早く帰って彼女に会わなければ……：犬耳美少女は人類の英知と宝です！」

静かに廊下を歩く隼人の影には青い巨人の姿が写っていた。最後にふざけるのはやめてほしいという作者の願いをねじ伏せて……というかアホ丸出しである。

## 第九話 「過去から未来へ、未来から過去へ」

『こつちだクリス！ 足を止めるではないぞ！』  
「わかってるよ！」

ノイズの気配を避けながら森の中を駆け巡る。我一人ならなんとかなるが、クリスも一緒にいるため戦いながら進むのは躊躇われる。

なんだったか……そう、シンフォギアとやらの力を使えば、なんとかなるかもしれぬがそれでは奴らに居場所がバレてしまう。

最近トリガーの動きもない。おかしい。奴ならば真つ先に駆けつけてきてもおかしくはないというのに。やはり先日の暴走が原因なのか？

「くそ！ もうイチイバル纏うぞ！」

『ダメだ！ そんなことをすれば瞬く間に連中にバレてしまう！』  
「だけど！ そんなこと言ってる場合じゃねえだろ！」

どうしたものか。今クリスを放っておくわけにはいくまい。戦場でただ一人生き残ってしまったクリスは誰よりも孤独を恐れておる。かつてのトリガーのようにな。

最初こそトリガーはなにも語らなかったが我らが根気よく話しかけた結果、少しずつとはいえ我らと会話をするようになった。一番喜んでいたのはカルミラだったな。ヒュドラムは皮肉こそ言うもののトリガーのことを歓迎していたからなあ。

トリガーは我らとは違い純粋な闇の一族ではない。奴には光も闇もなかった。ただ偶然我らと出会い、その環境から闇を吸収したのが暗黒勇士トリガーだ。

だが、我にはわかる。奴の心には光があると。

本来であれば光と闇、その両方の性質をあわせ持った巨人など存在しない。必ず光の巨人か闇の巨人かに別れるからだ。

だが、トリガーはその両方を心の縁に秘めている。恐ろしい男よ。



闇の一族随一の剛力を誇る我が一度たりとも勝てたことのない男だからだ。だからこそトリガーは我が好敵手に相応しい。

『お前は必ず我が逃がす！ だから、まだ我慢してくれ！』

「……………っ!!」

なぜそんな泣きそうな顔をするのだ。言ったであろう。お前は我が守ると。

く翼く

私は夢を見ているようだ。あの日怒り狂ったトリガーに敗れ意識を失った私は、どこかはわからぬ場所であらばうっと突っ立っている

た。

辺りを見渡してもなにもない。あるのは何者かに壊され崩された建物と元々は人間だったであろう赤い肉の塊。そしてそれらを貪る白い化け物の姿。

これは夢だ。現実であるはずがない。もし現実であるならば私がこうして立っている事さえ不可能のはずだから。

「まずは辺りを搜索するでしょう。もしかしたら私と同じように夢の中にいる者が存在するかもしれない」

そう思っただけは歩き出す。時々地上を彷徨く白い化け物を見かけるが、今の私にはシンフォギアを纏う力がない。だからできるだけ白い化け物に見られないように行動する。

白い化け物は崩壊した建物を食べたりしている。流星にそれが主食とは思わないが、他に食べれるものがないからだろうと勝手に結論付ける。

「ここはいったいどこなのだろうか？ 奏や立花の姿も見当たらない」

少しずつだが不安になってくる。もしかしたら永遠にこの世界から抜け出せないのではないか？ そう思ってしまったから。

アマノハバキリは今もペンダント状態のまま首にかかっている。でもなぜか胸の唄が聞こえてこない。それではシンフォギアを纏うことさえできない。

だが、仮に纏えたとしても、あの白い化け物にシンフォギアの力が通じるのかわからない。

「取り敢えずどこか隠れるような場所に移動しよう。このままでは見つかってしまう」

また歩き出す。

『……』

見つかってしまった。振り返ってはいけない。今振り返れば絶対に後悔する。そう感じた私はなにも考えずに走り出した。

「はあ、はあ、はあ……」

どうしたらいいのかなんてわからない。取り敢えず走る。足を止

めたら殺されるだろう。

「逃げなくては……」

それからも見つかっては走り見つかっては走りを繰り返した。結果的に体力が尽きて立ち止まってしまった。でも、もう走る必要もない。なぜなら

「囲まれてしまったか……」

どうやら白い化け物はかなり知能が高いらしく、どのよに追えばいいのかを考えているのではないかと思ってしまった。

現に私は白い化け物に追い込まれてしまった。もう逃げる体力もない。

「どこまでか」

そう、諦めた時だった。

「まだ、人が残っておったとはな」

風が通りすぎたような感じがすると共に、私の耳に男の声が聞こえた。思わず声のしたほうを向けば、

「気配を便りに動いてみるべきではあるな。こうして生存者に出会えたのだから」

抜き身の刀を振るう老人がいた。顔は深く被った笠のせいで見えないが、八十は越えているように見える。身のこなしは全然そうは思えないが。

「危ないところだったな小娘よ。怪我はないか？」

気づけば辺り一面にいた白い化け物は消えていた。恐らくこの老人が何かしたのだろう。

「あ、ああ。すまない。助けていただき感謝します」

「よい。罪無き命が散らされるのを見て黙ってはいられんからな」

そう言つて老人は刀を一度振るうと腰に差した鞘に納めた。

「儂の名は井嵩優斗いがさゆうとと言う。お前の名は？」

老人——いや井嵩殿は私の方に向き被っていた笠を少しだけ上げた。笠の下に見えた顔は私の知る老人とはまた違った顔つきだった。

腰まで伸ばされた黒い髪を後頭部で一纏めにし、細い瞼から見える

黒い瞳はまるで闇のようになにも写っていない。

「名乗りが遅れてすまない。私は風鳴翼という。改めて先程は助けていただき感謝します」

「そうか。ならば早めに動くとしようか。天の使いがここへ来るかもしれぬ」

「……天の使い？」

聞き慣れない言葉だ。

「そうか……お前は知らぬのか。天の使いとは、儂がまだ若かりし頃に呼ばれていた名よ。天の神が生み出した人類を滅ぼす存在だ。まあそうだな、かつてはバーテックスと呼んでいたな」

天の神、そしてバーテックス……やはりまた私が知らない単語が出てきた。どういうことだ？

「あの、つかぬことをお聞きしますが……ノイズと言う言葉に聞き覚えはありますか？」

「ノイズ……それがどのような意味があるかによる」

「そうですね。一番簡単なので言えば、ただ触れただけで人を殺す兵器、と言ったところでしようか」

そう言い終わった途端、彼の雰囲気が変わった。少しだけ警戒していた張りつめた感じから、どこか懐かしむように微笑んだ。

「そうか。お前はあの世界の住人か……だが儂が昔行ったときは違う……ふむ、平行世界か」

なにやら一人でぶつぶつと呟いている。よくわからないがノイズを知っているようだ。

「翼と言ったか。お前がなぜこの世界に存在するのか、それがわからぬ限り現実には戻れん」

「……どういう意味ですか？」

「そのままの意味よ。お前は恐らく、なにか強大な力を持つ者と争い敗れたのだろう。儂にはよくわからぬがそれに恐怖を抱いているように思える。違うか？」

「そんなことは……いえ、たぶんそうだと思います。私はトリガーが怖い。私がノイズを倒しに向かうよりも早く倒すアイツが怖い。そ

の力がいつ自分達に向けられるのだと思う怖くて仕方がない」

そうだ。奏やおじ様がトリガーと協力関係を結ぼうとしているのに対し、私はただただトリガーが怖いから今まで攻撃していた。

トリガーのあの覚めきったかのような目を向けられるのが怖かった。もしかしたらノイズを倒すのは気まぐれなのではないかと疑っていた。

二年前のあの日、奏と立花を救ってくれたのもたまたまだと思っていた。だからこそトリガーが怖い。

「お前のいうトリガーとやらが何者かは儂は知らん。その強大さもな。だが、言えることは一つだけ。どんなときでも受け入れる覚悟がなければ進むことはできん」

「……」

「儂には昔仲間がいた。ソイツは自分の目の前でクラスメイトをバーテックスに殺され復讐心からされていた。一時期リーダーとしての役割を忘れ敵に突っ込んでいた」

「その人はどうなつてのですか？」

「仲間の一人が叱責し、また違う仲間が助けた人たちに会わせたことで救われたよ。それからというものの、ソイツは今を生きる皆を助けるために戦った」

話終えた井嵩殿から悲しみが溢れているように見えた。昔と言っていることから、その人はもう今は生きていないのだろう。

「長くなったが、受け入れなければ何事も進めないと言うことだけ覚えておけばよい。翼、お前には仲間がいるんだ。それを忘れてはならん」

その後、彼の体から三つの光が私の元へ集まってきた。

それぞれ赤と青と白の光。

「その光はかつて儂と共に戦った神器の力……お前と共に現実に帰る力とせよ」

「いいのですか？」

「儂には仲間が残した生太刀がおる。怖いものなどありやせん」

そう言つて微笑んだ彼の姿が、黒い服に身を包んだ黒髪の少年に見

えた。一瞬だったからわからないが恐らく彼の若かった頃の姿なの  
だろう。

それから目の前が白い光で埋め尽くされる。もうなにも見えない。  
だが、怖くはない。今も私の近くに井嵩殿から頂いた光があるから。